

研究紀要

第19号

2004

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目次

序

〔論文〕

砂川期の基礎的研究(2) —ナイフ形石器を廻る諸問題 (上) —

……………西井 幸雄 (1)

押型文系土器群と沈線文系土器群終末期の関係性

—絡条体圧痕文土器の分析を通して画期を探る—

……………金子 直行 (25)

加曾利EⅢ式土器の拡散とフィードバック (前) ……………橋本 勉 (87)

瓢箪形注口土器の成立と展開……………上野真由美 (109)

方形周溝墓と土器Ⅱ 一概観 その1—……………福田 聖 (133)

埼玉県北部における10世紀以降の土師質土器

……………永井いずみ (169)

砂川期の基礎的研究(2)

—ナイフ形石器を廻る諸問題(上)—

西井幸雄

要旨 砂川期は、埼玉県所沢市に所在する砂川遺跡出土資料を基準とし設定された。本稿は研究紀要第17号に引き続き砂川期の基礎的研究を行う。前回のテーマは、2000年の砂川シンポジウムで設定した小地域を単位に共伴する尖頭器を分析し、その形態の多様性と伴う地域と伴わない地域のあり方を検討した。

今回は、入間川流域の遺跡を対象に、当該期のメルクマールともいえるナイフ形石器の石材、剥片素材、調整加工の部位、大きさを検討する。また、各遺跡の石器集中・石材も合わせてみてゆく事にする。

今後は、他地域に分析を広げ、南関東地域のナイフ形石器の在り方を検討してゆく。

はじめに

本稿は、2002年の研究紀要第17号に続き「砂川」をテーマとしている。2003年の大阪シンポジウムの予稿集で「砂川断想」として似たテーマで著しており、一部重複する部分もあるかもしれないが、筆者の一連の作業過程として了承してもらいたい。2000年のシンポジウム以来「砂川」と関わってきたが、その問題の多義性に苦慮している。視点を変えることで無限とも思える研究テーマに対し、微力であるが挑んでゆきたい。今回はナイフ形石器をテーマとしたが、南関東地域全域までには及ばず入間川流域に限定した。今後、武蔵野台地、相模野台地を対象にナイフ形石器の分析を行ってゆく。

1) ナイフ形石器の分類

砂川期のナイフ形石器の分類は、砂川遺跡の2冊の報告書が端緒である。1968年の考古学集刊に掲載された「埼玉県砂川遺跡の石器文化」(A地点)の中で、戸沢充則氏はナイフ形石器の分類の項で第Ⅰ形態～第Ⅲ形態に区分した。

第Ⅰ形態：「先鋭な先端と、それにつづく身の半分以上の長さの、これまた鋭い刃部をもつナイフ形石器」

第Ⅱ形態：「第Ⅰ類のナイフ形石器にくらべると刃部が短く、かつ先端の角度が鈍い。全体の形状は短小で巾広といえる」「いわゆる「切出形ナイフ形石器」の範疇に入るものと考ええる。しかし、第Ⅰ形態との分化はまた不完全で、定形化した切出形石器とはいえない」「同一原石による…中略…製作の過程から意識された形態のちがいを示しているもの」

第Ⅲ形態：「素材の先端を斜めに断ち切るように打ち欠いただけのナイフ形石器である。そのため特に鋭い先端は作出されず、鋭利な側縁だけが刃として重視されたものとみられる」「いわば切截専用のナイフ形石器」「ナイフ形石器をふくむ石器文化…中略…全国的にかなり検出され…中略…不定形であるが故に、あまり積極的にその存在の意味が評価されなかった」

次に、「ナイフ形石器の形態と型式」の項で、第Ⅰ形態を「刺突を主要な機能」、第Ⅱ形態を「おそらく切る削る機能をより大きな目的」、第Ⅲ形態を「切截を主要な機能目的」と想定した。

1974年に砂川遺跡調査団編で所沢市教育委員会によって『埼玉県所沢市先土器時代遺跡—第2次調査の記録—』(F地点)が刊行された。報文の中で鈴木次郎氏は、F地点出土のナイフ形石器をA～F類に細分した。

A類：「刃器状の剥片の上下両端を斜めに断ち切るような急斜な調整加工」「刃部の反対側縁にも細かな調整加工を施し基部を丸く仕上げている」

B類：「刃器状の剥片を素材とし、基部に集中的に調整加工を施したナイフ形石器で、先端部の一側縁にも調整加工を施して先鋭な先端部を形成」

C類：「器体の一側縁のみに調整加工」

D類：「素材の一部を断ち切るように調整加工」

E類：「ととのった刃器状剥片の打面付近の両側縁に微弱な調整加工」

A地点との比較をみると、A類はA地点の第I形態の多くと第II形態、B類はF地点のみ、C類はA地点の第I形態の一部、D類はA地点の第III形態、E類はA地点ではナイフ形石器に含めていない。A～B類を第I形態、D類を第III形態に対比し、E類は問題が残るとしている。

E類を除いたA～D類はそれぞれ「独立した形態—A類=形態A、B類=形態B、C類=形態C、D類=形態D—」とし、類から形態にすることによって機能の差を想定し、その製作過程における一定の規則性として素材の選択、素材に対する調整加工の位置等に注目している。また、A～Cは関東地方におけるナイフ形石器群の中で多少はあるが通時的にみられ、型式変遷していと述べている。ここで示された視点と分類基準は、矢島國雄氏との共著「相模野台地における先土器時代研究の現状」(矢島、鈴木1976)の中で、ナイフ形石器をトータルにみる視点が重視されタイプリストともいえる形態A～Eへと発展した。

白石浩之氏は、砂川遺跡に限定するものではないが、1973年の「茂呂系ナイフ形石器の細分と変遷に関する一試論」の中で、ナイフ形石器の細分について論及している。白石氏はナイフ形石器を「形態面からみたナイフ形石器の特徴はナイフ形石器として認定するブランディングの規則性にある」と規定し、小林達雄氏の「実体化過程の仮説」に則して、ナイフ形石器を原石の選定から機能適合を一連の流れとして有機的に捉えている。戸沢充則氏が「細分は形態の区分のもと」に行うのに対し、滝沢浩氏が市場坂遺跡を通して「関東・中部地方におけるナイフ形石器文化とその終末」の中で「ナイフ形石器を体系的にまとめ、編年(変遷)への分析に力が注がれた」点に注目し、関東及び中部高地のナイフ形石器をA～E型に細分している。

A型：良好な剥片を素材とし、先端・基部は折(切)断手法→ブランディング加工によって尖らしている。背面(裏面)基部加工

B型：剥片を素材とする。先端は尖るが、基部を丸く加工する。背面(裏面)基部加工は顕著でない

C型：貝殻状剥片、縦長剥片を横位に用いる。先端部ないし両側縁を折断し、その部位に加工。前者を切出形石器、後者を台形石器

D型：粗雑な剥片を利用。折(切)断手法が用いられず、ブランディングは片側縁のみで、打面、原石面を残存させる場合が多い

E型：剥片の先端部を折(切)断し、その部位にのみブランディングが施される

以上茂呂系のナイフ形石器を5細分しA・Bを精製品、Dを粗悪品、C・Dをどちらかという

と精製品に近いとしている。ここで行った細分をもとに通時的・共時的に検討を施し、ナイフ形石器を2時期に区分した。I期は素材の形状をあまり変えず有効利用する段階で、II期は「素材と石器の形状が合致せず、素材を変革しようとする姿勢が折(切)断手法で体现」される段階としている。砂川遺跡はII期でA・B・D・E型の組み合わせからなり「A型が比較的多く、他型式はほぼ均等した組成を示している」としている。白石氏は「型式の組み合わせ」に注目し、ナイフ形石器の型式が「順次増幅する傾向がある。これは多分に機能分化の定着を提示するものと思われる」としている。

1979年の神奈川考古同人会が開催したシンポジウム「ナイフ形石器文化終末期の問題」に関連した特集号『神奈川考古第7号』で、田中英司氏は「武蔵野台地II b期前半の石器群と砂川期の設定について」を著している。その中で砂川遺跡A・F地点、鶴ヶ丘遺跡C区、前原遺跡、茂呂遺跡、市場坂遺跡のナイフ形石器を検討し、以下の4類に細分した。

- 1類：一側縁の加工が先端部にのみ施されるもの。先端角が鈍角で調整加工の範囲は殆ど全長の半ば前後前後に限られるものが多い
- 2類：一側縁加工が先端からほぼ基端まで施されたもの。先端角は1類よりも鋭角的に形成されるものが多い
- 3類：両側縁にわたる加工が施されて背縁・側刃縁と刃部とが形成されているもの。側刃角が130度以下のものをI、それ以上ものをIIとする。さらに基部を中心とした裏面加工を以下の5種類を想定している
 - a種：基部が背縁・側刃縁側ともに正面加工のみによって製作されているもの
 - b種：正面では二側縁に加工がなされ、さらに側刃縁側にも裏面加工されるもの
 - c種：正面・裏面にわたるに側縁加工によって基部が製作されているもの
 - d種：背縁側では正面に、側刃縁側では裏面にのみ加工されるもの
 - e種：ほぼ裏面加工のみによって基部が作出されるもの
- 4類：調整加工が基部付近のみほぼ限られるもの

これに加え素材剥片の用い方、刃部の位置等の分析を行い。「2類・3類II・4類を構成する概形や調整加工の各要素はそれが3類IIにおけるあり方を中心として個々の差異を越えた共通性で結ばれているナイフ形石器を第1形態」とし、「1類の石器群は各様の調整加工によって先端が鈍角的に作出され、基部の調整加工が認められない点で第1形態と対照的であるものを第2形態」とし「各類別のナイフ形石器が基本的に第1形態と第2形態の2つのまとまりの中に区分されて両者に共通する剥片剥離過程の三者の結びつきを持って時空的な範囲を限る」石器群を「砂川期」としている。

これが砂川期ナイフ形石器の2形態区分であり、筆者もこの分類に沿ってナイフ形石器をみてきたが、ともすると二側縁加工と端部加工に矮小化して捉えがちである。筆者なりに田中分類を理解すれば3類IIを中心に個々の差異を越えた共通性と基部加工に注目(第1形態)し、それと対照的な石器群(第2形態)と捉えておく。

2000年の砂川シンポジウムで勝山百合氏は「砂川遺跡からみた「砂川期」のナイフ形石器」を著し、砂川遺跡出土のナイフ形石器を対象に分析を行っている。その手法は織笠氏の「石器観察の三要素」(織笠1984.1985)に基づき、形：「正面形」「側面形」「横断面形」「正面先端角」

「側面先端角」、加工：「加工部位」「加工の状態」、素材：「素材の使い方」「剥離面の方向」「大きさ」「刃角」「背部側調整角」「刃部側調整角」「石材」の項目に亘る詳細なもので、A地点とF地点のナイフ形石器の共通点と相違点を記述している。「剥片剥離とナイフ形石器」の項目で異なる形態のナイフ形石器の間で「素材としての選択基準の違い」の可能性、「剥片剥離の進行状態に合わせて作り分けられていた…中略…同じ一つの母岩であってもその状態は絶えず変化しており、それに対応した素材が生み出される。この変化に対応して異なる形態のナイフ形石器が同一母岩から作られているとの重要な指摘がされている。

2 各地域の様相

1 入間川流域【砂川期：砂川型】及びその周辺

入間川流域は、武蔵野台地の地域名称としての川越台地と入間台地を対象とする。「川越台地は青梅を扇頂とする多摩川の古い扇状地の北部にあたり北東ないし東方に低下する地形」（堀口他1987）で、狭山丘陵から延びる所沢台（下末吉面）、加治丘陵の南側に沿って延びる金子台（下末吉面）と川越台（武蔵野面）、その中間に広がる扇状地の大井台（武蔵野面）と不老川面（立川面）の地形面で5つに区分されている。入間台地は入間川、越辺川・高麗川によって作られた扇状地で毛呂台地、坂戸台地、飯能台地に区分されている。遺跡は武蔵野台地は下末吉面にあたる所沢台と金子台に主に分布しており、入間台地は飯能台地側に多く、坂戸台地に位置する富士見一丁目遺跡は石器群が異なり、入間川流域の遺跡群とは分離して考えている。

a) 砂川遺跡

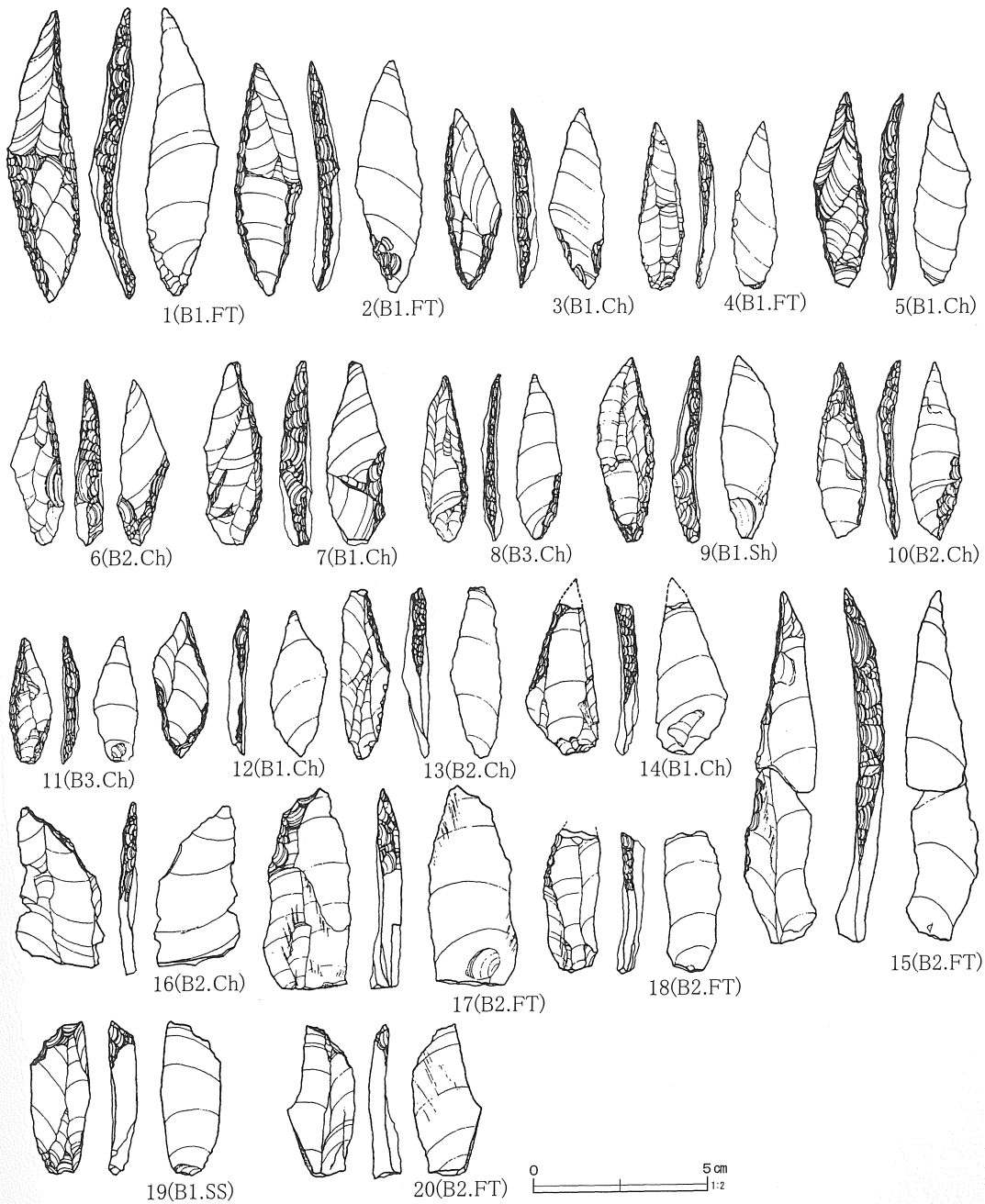
砂川遺跡は狭山丘陵から延びる所沢台に位置し、標高は大凡120mである。遺跡は現在埋没谷となっている砂川堀の源流部に近接している。

明治大学によって2回の発掘調査が実施され報告されている。調査地点は近接し、地点間の母岩の共有関係がある一方で、石器群の顔つきに若干の違いもみられなど興味深い。該期の研究にあたり、砂川遺跡は正にその原点であり、本遺跡から出土したナイフ形石器の検討からは始める必要がある。

石器集中は6箇所検出されている。A地点は南北方向に並び、それぞれが近接しているのに対し、F地点は若干の距離をおいている。また、F地点3ブロックからは礫群が伴っている。

両地点のから出土した石器の総点数は792点で、石器石材はチャート66%、凝灰岩31%で全体の97%を占めている。凝灰岩に関しては相模野台地との関連が注目されるが、当該地域で頁岩と表記されている石材との関連も注意しなければならない。何れにしても、石材名称の統一と石材産地の特定が重要になる。Toolはナイフ形石器が主体を占め、若干の彫器が伴うのは、他の遺跡と共通する。しかし、搔・削器がまったくみられないのは、分類基準の問題かもしれない。Toolの全体に占める割合は6%である。

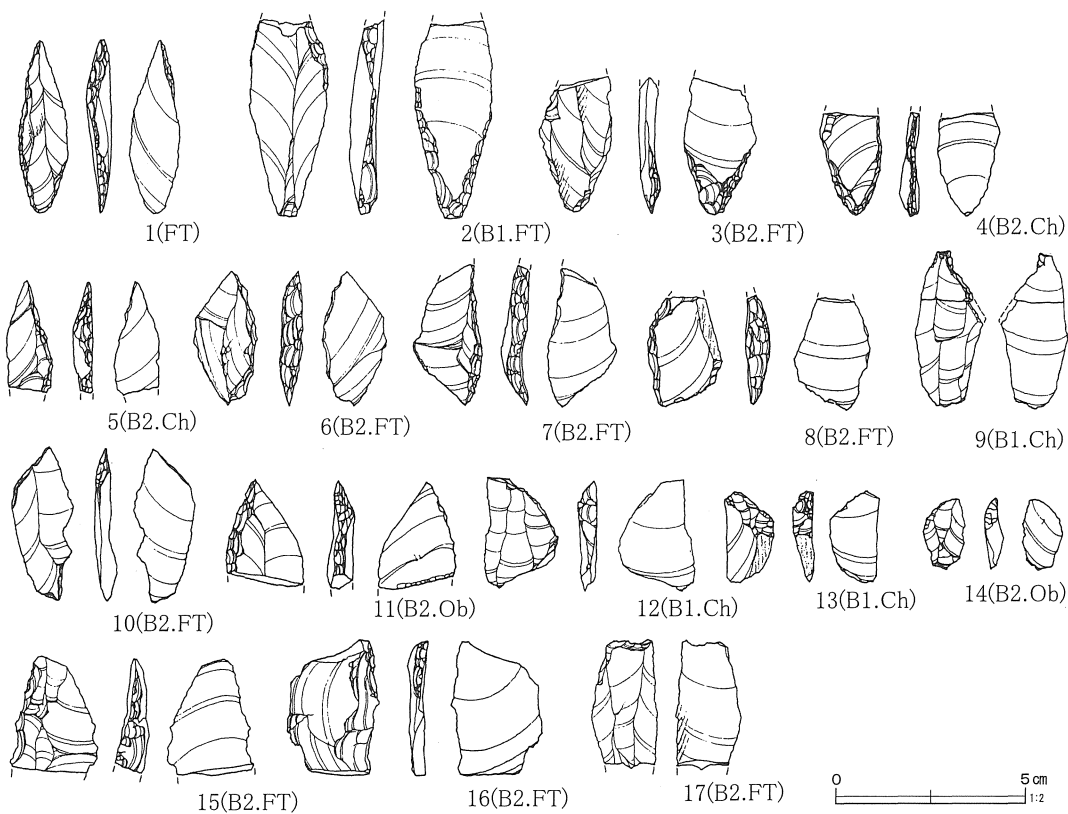
※文献によって点数及び石器石材、器種表記に若干の違いがみられるが、ここでは砂川2次調査の報告書（1974）の表記にしたがった。



石材凡例

チャート:Ch 凝灰岩:FT 黒耀石:Ob 頁岩:Sh
 安山岩:An 赤玉石:RJas 砂岩:SS 粘板岩:Sl

第1図 砂川遺跡A地点



第2図 砂川遺跡F地点

A/F地点

器種組成

ナイフ形石器	尖頭器	掻・削器	彫器	その他	剥片	碎片	石核	合計
48	0	0	2	0	396	326	20	792
6%	0%	0%	0%	0%	50%	41%	3%	100%

石材組成

凝灰岩	珪岩	黒耀石	頁岩系	砂岩	ホルンフェルス	安山岩	その他	合計
246	520	11	2	12	0	0	1	792
31%	66%	1%	0%	2%	0%	0%	0%	100%

ナイフ形石器の石材組成

凝灰岩	粘板岩	珪岩	黒耀石	頁岩系	安山岩	その他	合計
22	0	20	2	1	0	1	46
48%	0%	44%	4%	2%	0%	2%	100%

次に、A地点とF地点を分けて記述する。

A地点（1図）

石器集中の概要

A-1ブロック：石器点数は166点で、遺物分布の密集度は高い。石器石材は珪岩が94%を占め主石材である。Toolはナイフ形石器が9点出土している。

A-2ブロック：石器点数は60点で、遺物の分布は散漫である。石器石材は珪岩55%、凝灰岩40%と拮抗している。Toolはナイフ形石器7点と彫器が出土している。

A-3ブロック：石器点数は128点で、遺物分布の密集度は高い。石器石材は珪岩が88%を占め主石材である。Toolはナイフ形石器が4点出土している。

石器集中はほぼ南北方向に直線に並んでいる。A-1とA-3ブロックが遺物の密集度が高く、その中間の遺物分布が散漫になる部分がA-2ブロックである。各ブロックともナイフ形石器が複数点出土している。石器石材は珪岩（チャート）を主体としながら、一定量の凝灰岩が含まれる。

器種組成

ナイフ形石器	尖頭器	搔・削器	彫器	その他	剥片	碎片	石核	合計
23	0	0	1	0	156	173	8	361
6%	0%	0%	0%	0%	43%	48%	2%	100%

石材組成

凝灰岩	頁岩	珪岩	黒耀石	砂岩	その他	合計
41	1	306	1	12	0	361
11%	0%	85%	0%	3%	0%	100%

ナイフ形石器の石材組成

凝灰岩	粘板岩	珪岩	黒耀石	頁岩系	安山岩	その他	合計
7	0	14	0	1	0	1	23
30%	0%	61%	0%	4%	0%	4%	100%

ナイフ形石器

ナイフ形石器は3箇所の石器集中から23点出土した。石材及び大きさ、調整加工の配置等のみてゆくことにする。石材は珪岩（チャート）14点、凝灰岩7点、頁岩1点で、珪岩（チャート）が61%を占める。ナイフ形石器の形態分類は第1形態が18点（1～15）、第2形態が5点（16～20）で第1形態が第2形態の約3倍である。第1形態は珪岩（チャート）が多く、大形品に関して凝灰岩が用いられている。一方、第2形態は凝灰岩の方が多く、砂岩のように少ない石材が用いられている。

第1形態のナイフ形石器を検討すると、素材剥片は上位が4点、下位が11点と下位が多く、14・15は打面を残置している。15は器体中央で破損しており、下半分は彫器に転用されているが、基部加工がみられず打面の残置している点など、製作途上の破損と思われる。凝灰岩のナイフ形石器は全て下位である。刃部は右刃6点、左刃8点と有意な差はみられない。次に、調整加

工とその部位を検討する。

【背縁加工の加工】

- a) 基部から先端までブランディングが施されている (1~3、5、7~11)
- b) 上半部にブランディング、下半分に微細な調整加工が施されている (4、12)
- c) 上半部のみにブランディングが施されている (13~15)
- d) 上半部がブランディング、下半分に裏面加工が施されている (6)
- e) 上半部は調整加工がなく、下半部に裏面加工が施される
- f) 上半部は調整加工がなく、下半部にブランディングが施される

【側刃縁の加工】

- i) ブランディングが施されている (1~3、5、9、11、12)
- ii) 微細な調整加工が施されている (4)
- iii) 裏面加工が施されている (6~8、10)
- iv) 加工が施されない (13~15)

【基部の形状】

- 1) 先鋭となるもの (1~3、6、9、12、13)
- 2) 円基のもの (4、8)
- 3) コ字状になるもの (5、7、10、11、14、15)

【基部裏面の調整加工の有無】

以上、砂川遺跡A地点のナイフ形石器に対し上記の細分が可能である。この基準を用いて他の遺跡を検討する。

F地点 (2図)

石器集中の概要

F-1ブロック：石器点数は186点で、遺物の分布は密集している。石器石材は珪岩 (チャート) 76%と主石材であるが、凝灰岩の24%と一定量含まれる。Toolはナイフ形石器5点と彫器が出土している。

F-2ブロック：石器点数は211点で、遺物の分布は密集している。石器石材は凝灰岩が73%で主石材となり、珪岩 (チャート) が23%とF-1ブロックと逆の組成を示している。Toolはナイフ形石器17点とまとまっている。

F-3ブロック：石器点数は15点と少なく、遺物の分布は散漫である。集中部と重複して礫群が検出されている。石器石材は珪岩 (チャート) 73%と主石材である。Toolは出土していない。

F-2とF-3ブロックからは黒耀石が少量であるが出土している。

器種組成

ナイフ形石器	尖頭器	搔器・削器	彫器	その他	剥片	碎片	石核	合計
25	0	0	1	0	240	153	12	431
6%	0%	0%	0%	0%	56%	35%	3%	100%

石材組成

凝灰岩	頁岩	珪岩	黒耀石	砂岩	その他	合計
205	1	214	10	0	1	431
48%	0%	50%	2%	0%	0%	100%

ナイフ形石器の石材組成

凝灰岩	粘板岩	珪岩	黒耀石	頁岩系	安山岩	その他	合計
15	0	6	2	0	0	0	23
65%	0%	26%	9%	0%	0%	0%	100%

ナイフ形石器

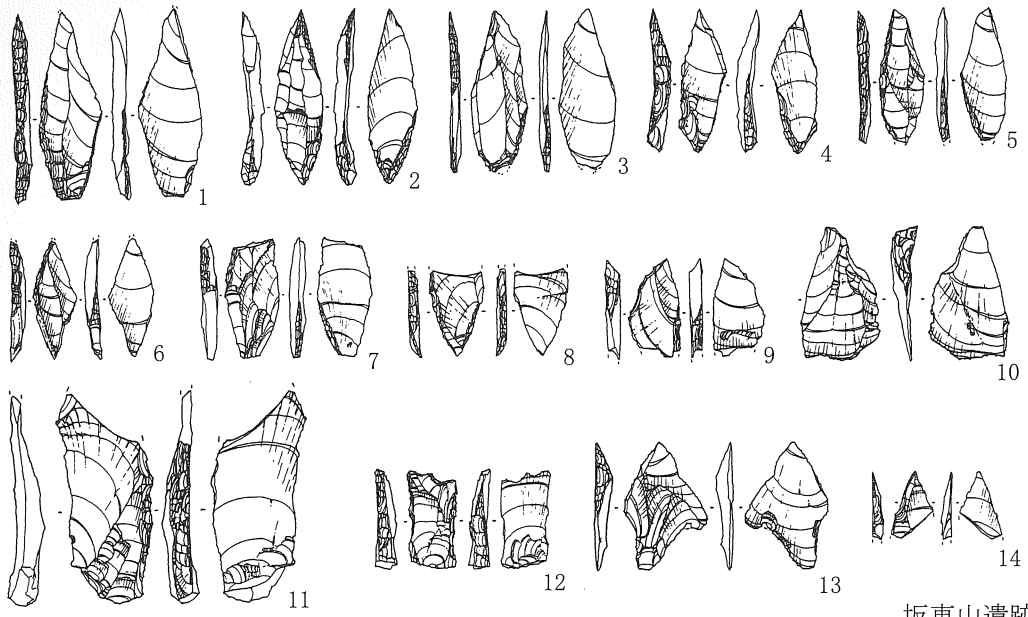
F地点は石器集中2箇所から、ナイフ形石器25点が出土した。第1形態が6点(1~5))と少なく、第2形態(6~17)が15点である。また、第1形態は殆どが破損品で、データーが取れたのは1点のみである。石器石材は珪岩(チャート)6点、凝灰岩15点である。ナイフ形石器の形態及び石材の用いられ方はA地点と対称的である。第1形態の素材剥片は上位が3点、下位が3点で刃部は右刃2点、左刃1点である。次に調整加工をみると、背縁加工は1・4・5がb)、2・3がe)、側刃縁は4がi)、1がii)、2・3がiii)で基部の形状は4が1)、1~3が2)である。

b) 坂東山遺跡(3図)

坂東山遺跡は埼玉県教育委員会と入間市遺跡調査会の調査によって、縄文時代中期と後期の大家集落として著名である。旧石器が検出されたのは、埼玉県埋蔵文化財調査事業団が圏央道関連で調査した地点で、県教育委員会が調査した国道229号線の西側に接している。遺跡は、加治丘陵の東端部付近で、霞川が入間川に合流する地点から南西に約3km、霞川左岸段丘に立地し標高は約116mである。遺跡の詳細な地形をみると、霞川との標高差は約20mと大きく、台地部は丘陵からの小河川が北東(入間川)方向に何条も流れている。坂東山遺跡は秋津川の谷頭を囲んでおり、石器集中が検出されたのは、まさに谷頭の西側縁部である。発掘調査は幅約50mで面積33,000㎡と広大に亘っており過去の調査状況を鑑みると、当該期の石器集中の広がりはいままで以上に大きい。

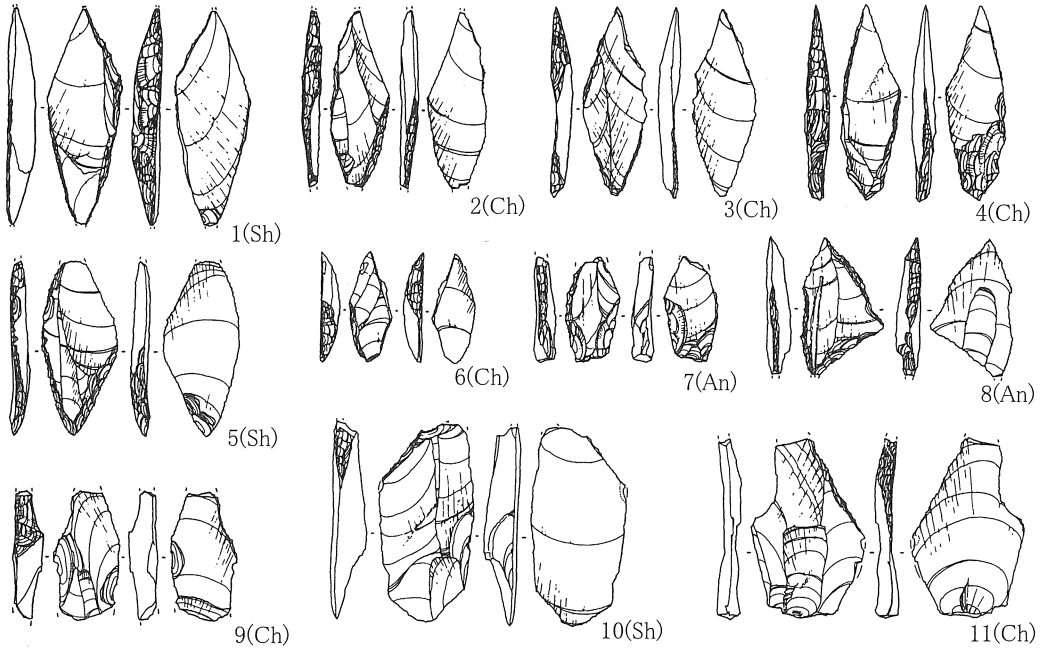
石器集中は調査区の東端部から検出されており、一部調査区外に広がっている。その為、石器の一部は欠如しているが、全体の傾向はほぼ把握できていると思われる。

出土石器の総点数は570点である。器種組成は本地域の特徴と共通してナイフ形石器と掻・削器が主体を占めている。その他の石器として敲石/磨石4点と礫器1点が出土している。石器石材は、チャートが98%を占め主石材である。その他の石材は、砂岩/安山岩は敲石・磨石・礫器、珪質頁岩/ホルンフェルスは剥片、黒耀石は碎片として遺跡内に残されている。主石材のチャートは肉眼観察により6母岩に分けられた。ナイフ形石器を含む母岩はチャート1とチャート3である。チャート1は石器点数301点で全体の53%と大勢を占め、チャート3は75点と13%を占めるのみであるが、ナイフ形石器の多くはチャート3である。

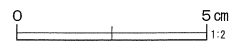


※ 石材は全てチャート

坂東山遺跡



屋瀨遺跡



第3図 坂東山・屋瀨遺跡

器種組成

ナイフ形石器	尖頭器	搔・削器	彫器	その他	剥片	碎片	石核	合計
14	0	5	0	5	103	440	3	570
2%	0%	1%	0%	1%	18%	77%	1%	100%

石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	頁岩系	砂岩	ホルンフェルス	安山岩	合計
0	0	557	2	2	3	2	2	568
0%	0%	98%	0%	0%	1%	0%	0%	100%

ナイフ形石器の石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	頁岩系	安山岩	合計
0	0	14	0	0	0	14
0%	0%	100%	0%	0%	0%	100%

ナイフ形石器

1箇所の石器集中から14点出土している。石器石材は全てチャートである。第1形態8点（1～8）、第2形態5点（9～13）と第1形態の方がやや優勢である。大きさは3～5cmにまとまり、第2形態が幅広の傾向がみられる。第1形態のナイフ形石器を観察すると、剥片素材は上位4点、下位4点と同数で、刃部は右刃6点、左刃が1点と右刃が圧倒的である。背縁加工は1・2・4～6・8がa)、3・7がc)、側刃縁の加工は8?がi)、1・3がii)、2・4・6・8・がiii)である。2の背縁加工は先端と基部付近にブランディングが集中し中間は殆ど加工が施されていない。基部形状は2・4・6・8が1)、1・7が3)となる。裏面加工が非常に卓越していることが特徴である。なお、7は上半部が欠損した後に調整が施されたものと思われる。

c) 屋涿遺跡（3図）

屋涿遺跡は高麗丘陵の南側、南小畦川の右岸に位置する。標高は石器集中が検出された地点で約108mである。入間台地を流れる河川は西部の山地や丘陵に端を発して、おおむね北東方向に流れて越辺川、入間川に流入している。南小畦川は小畦川の支流である。

発掘調査は、南小畦川を挟んで南北方向に延びており、川を挟んで北側に栗屋遺跡が存在する。屋涿遺跡の調査区は長さ180m、幅約20mである。標高は北から南に徐々に高くなり、石器集中が検出された地点をピークに南側に徐々に下がる、馬の背状の地形である。旧石器確認のための深堀がかなり密に入れられていることから、調査区内での石器集中の広がりは考えられず、馬の背状の限られた空間だけが利用されていたと思われる。東西方向の遺跡の広がりは不明であるが、現状では石器集中1箇所の単独と捉えておく。

石器集中はほぼ全体が把握できる状況である。遺物の分布は西側に帯状の密集部があり、東側にナイフ形石器が多く分布している。特に北東部にナイフ形石器3点が集められた様にまとまっている。また、礫が128点出土しているが、殆どが小砂利状の円礫で分布が散漫なことから、人為物とは考えられない。

石器総点数は153点である。石器石材はチャートが全体の90%を占め、他は頁岩系とガラス質黒色安山岩がそれぞれ5%である。Toolはナイフ形石器のみ12点検出されている。

器種組成

ナイフ形石器	尖頭器	搔・削器	彫器	その他	剥片	碎片	石核	合計
12	0	0	0	0	53	86	2	153
8%	0%	0%	0%	0%	35%	56%	1%	100%

石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	頁岩系	砂岩	ホルンフェルス	安山岩	合計
0	0	138	0	8	0	0	7	153
0%	0%	90%	0%	5%	0%	0%	5%	100%

ナイフ形石器の石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	頁岩系	安山岩	合計
0	0	6	0	4	2	12
0%	0%	50%	0%	33%	17%	100%

ナイフ形石器

石器集中1箇所からナイフ形石器が12点出土した。石材はチャート6点、頁岩系4点、ガラス質黒色安山岩2点である。頁岩系及びガラス質黒色安山岩の製品率が高い。また、頁岩系の3点は相対的に大形で、ガラス質黒色安山岩は7が厚手、8が幅広とチャートの一群とやや顔つきが異なっている点も注意される。大きさは4cm未満と5~6cmで幅広のグループがある。第1形態のナイフ形石器を観察すると、素材剥片は上位が5点、下位4点とほぼ同じで、刃部は右刃6点、左刃3点で右刃の方が優勢で、坂東山遺跡と同じ傾向を示す。背縁加工は1~5・7・8がa)、6がb)で側刃縁の加工は8?がi)、1・3がii)、2・4・5・7がiii)であるが、背縁加工の3は先端部と基部付近にプランティングが集中し中間は殆ど加工がみられない。基部形状は2・4・6・8が1)、1・7が3)で、1・4・5は裏面に調整加工が施されている。

坂東山遺跡と規模/石器組成等近似しているが、ナイフ形石器の大きさ/調整加工の在り方をみるとやや異なる。坂東山遺跡で裏面加工が卓越するのに対し、屋淵遺跡では裏面加工は用いられず、代わりに基部裏面に調整加工が施されるものがみられる。また、坂東山遺跡はチャートのみでナイフ形石器が作られているのに対し、屋淵遺跡は全体ではチャートが卓越しているが、頁岩、ガラス質黒色安山岩等の少量の石材が用いられ、チャートと大きさ/形態に違いがみられる。

d) 西久保遺跡 (4図)

西久保遺跡は入間川の左岸の入間台地に位置し、標高は約76~77mである。発掘調査は圏央

道の狭山日高ジャンクションの建設に伴うもので、調査面積は60,000㎡と広大である。調査区内に浅い埋没谷があり、石器集中は埋没谷が北側に屈曲し、台地部が南東側に突き出た部分に、2つのグループを形成している。標高76m付近に石器集中1 a～1 cの3箇所、77m付近に石器集中2・3・4の3箇所が検出された。

石器集中の概要

石器集中1 a：石器点数は377点で、遺物分布の密集度は高い。石器石材はチャートが91%を占め主石材である。Toolはナイフ形石器4点と搔・削器が出土している。

石器集中1 b：石器点数は262点で、北西側の密集部と南東側の散漫な部分からなる。石器石材はチャートが87%を占め主石材である。Toolはナイフ形石器4点、搔・削器、彫器、敲石と多様である。

石器集中1 c：石器点数は58点と少なく、遺物の分布は散漫である。石器石材はチャートが72%と他の石器集中と比べると割合がやや低い。Toolはナイフ形石器3点、搔・削器、彫器と点数が少ないわりに製品の占める割合が高く、また、多器種である。

石器集中2：石器点数は149点で、遺物分布は直径約2mの範囲にまとまっている。本石器集中と石器集中4は近接しており、石器集中3とは約20mと距離がある。石器石材はチャートが79%を占め主石材である。Toolはナイフ形石器5点のみである。

石器集中3：石器点数は1342点と全体の59%を占める。遺物分布は非常に密集しているが、東側の一部が後世の溝によって失われている。石器石材はチャートが87%を占め主石材であるが、点数が多いこともあり、多様な石材がみられる。Toolはナイフ形石器15点、搔・削器、ドリル、ストンリタッチャーなどがみられる。また、集中部内での接合が多い。

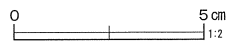
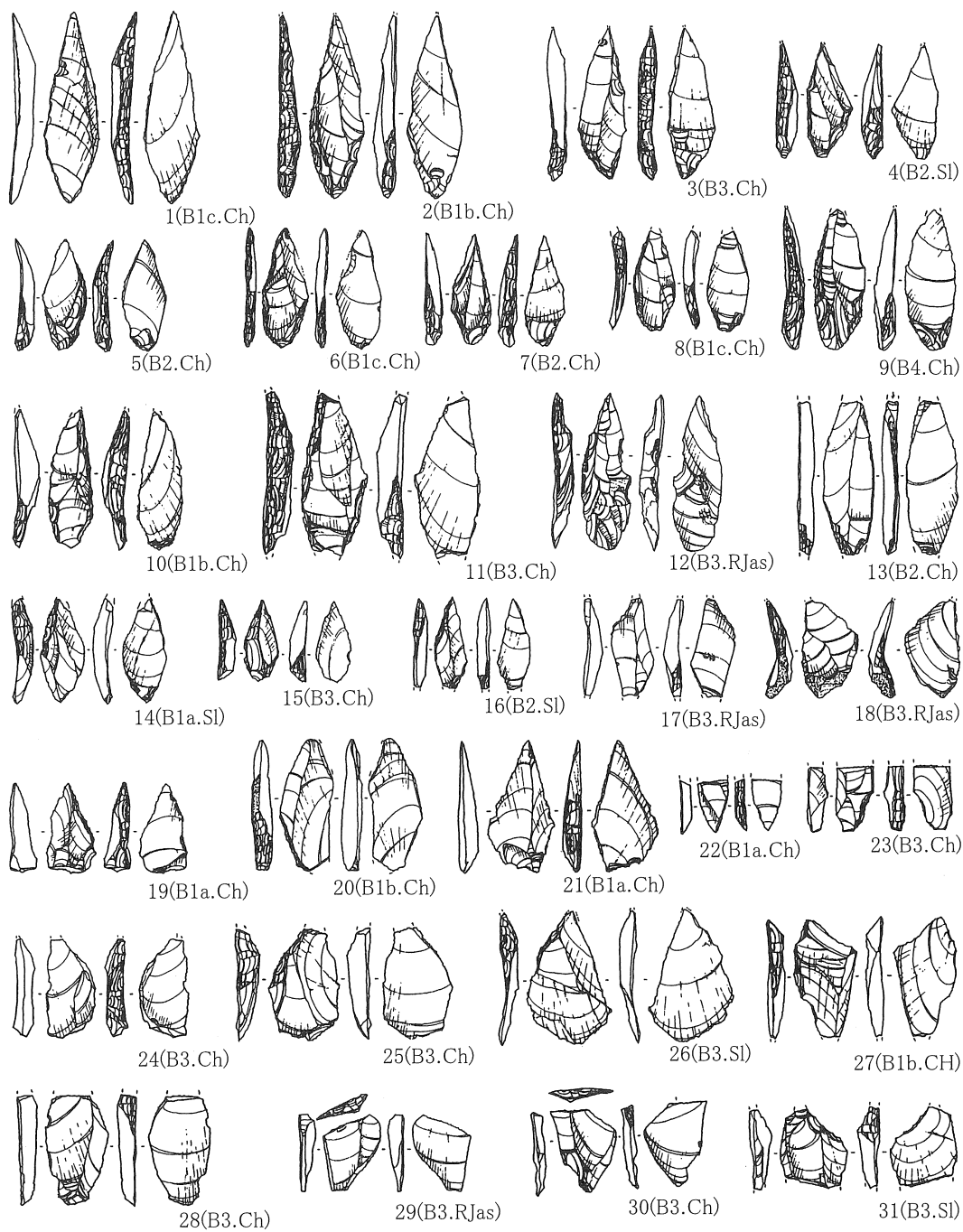
石器集中4：石器点数は78点と少ない。本石器集中は溝によって東西両側が壊されている。石器石材はチャートが91%を占めている。Toolはナイフ形石器2点と搔・削器が出土した。

各石器集中を概観したが、いずれもチャートを主石材とする点では共通しており、点数の多少は在るがナイフ形石器を一定量保有している。また、石器集中3は中心的集中部で、ナイフ形石器の点数が多く、稀少な石材を用いたナイフ形石器等が出土している。石器の接合は集中部内にとどまるものが殆どである。不完全な母岩分類であるが、その広がりをみると、石器集中を横断するものが認められる。

石器の総数は2277点と当該地域で最大規模の遺跡である。石器石材は、チャートが87%を占めている。他の石材は量的には少ないが多様である。また、砂岩は敲石等に用いられている。石器総数に占めるToolの割合は1%と低いが、ナイフ形石器33点、搔・削器、彫器、ドリル、敲石と基本的な器種はほぼ組成している。

器種組成

ナイフ形石器	尖頭器	搔・削器	彫器	その他	剥片	碎片	石核	合計
33	0	12	2	3	590	1603	34	2277
1%	0%	1%	0%	0%	26%	70%	1%	100%



第4図 西久保遺跡

石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	頁岩系	砂岩	ホルンフェルス	安山岩	合計
0	274	1976	0	5	3	16	3	2277
0%	12%	87%	0%	0%	0%	1%	0%	100%

ナイフ形石器の石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	頁岩系	安山岩	合計
0	5	26	0	0	0	31
0%	16%	84%	0%	0%	0%	100%

ナイフ形石器

西久保遺跡は、石器集中の数と遺物点数から当該地域で中心的遺跡である。ナイフ形石器は33点出土している。石器石材はチャート84%（報告書では赤玉石を赤色のチャートとしたため、分離できていない）粘板岩16%で、全体の組成の傾向とほぼ同じである。また、第1形態と第2形態で石材の使い分けはみられない。赤玉石は肉眼観察でみる限り同一母岩であるが、接合から3個体に別れナイフ形石器4点（12・17・18・29）が含まる。何れも小形で、他のチャートが贅沢に剥片剥離されているのに対し、極力Toolに加工しようとする意図が伺える。ナイフ形石器の形態は第1形態22点（1～20）、第2形態9点（21・24～31）と第1形態の優勢で、大きさは2～6cmの範囲で、他の遺跡と比べると小形のものが多いようである。また、第2形態はやや幅広く他遺跡共通する。第1形態のナイフ形石器を観察すると、素材剥片は上位が15点、下位5点、その他2点で、上位が優勢であるが、また横広剥片等も用いられており、資料数の多い遺跡では多様な剥片剥離が存在することが示唆される。刃部は右刃が11点、左刃9点で坂東山/屋淵遺跡のような偏在はみられない。背縁加工は1～7・9～11・13・18・19がa)、8・12・15・16がb)、14がc)で、側刃縁の加工は2～11・13～16・18がi)、1がii)、12・14・19・20がiv)である。13の背縁加工は先端から基部まで微細な剥離が施されている。基部形状は1～5・14が1)、6～9・12・18が2)、10・15・19・が3)である。裏面加工がみられないのに対し、基部裏面の調整加工は2～5・7・9・14等で施されている。

e) 城の腰遺跡 (5図)

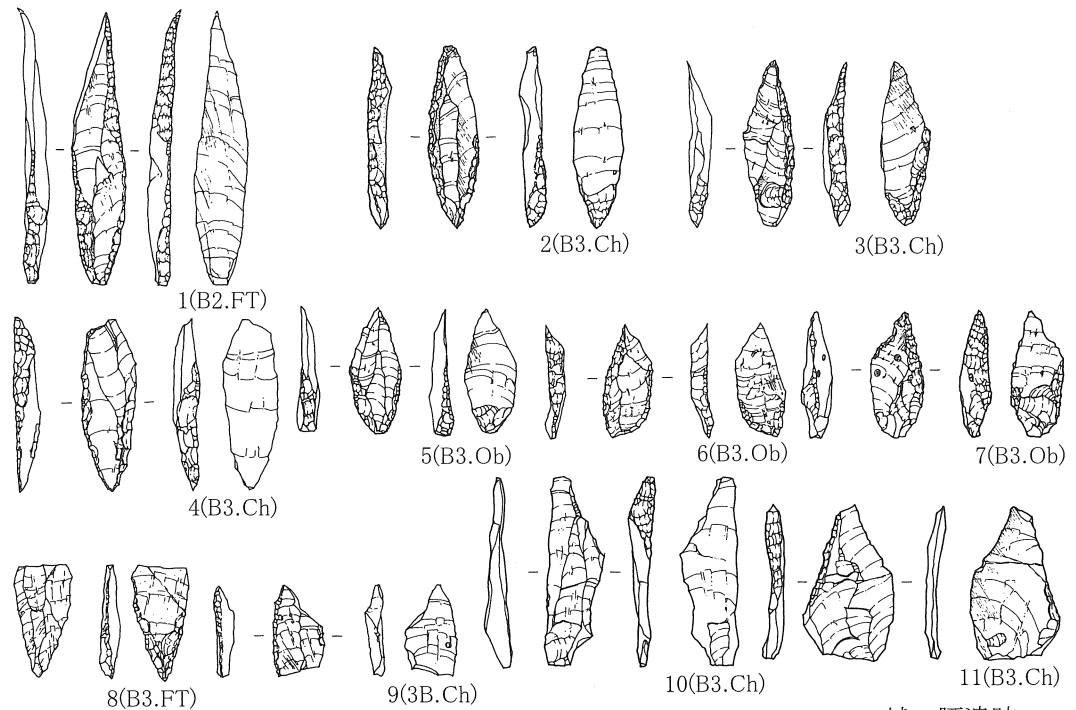
城の腰遺跡は入間川支流の霞川左岸、加治丘陵から南東に樹枝状に突き出した台地上に位置する。当該地域は武蔵野扇状地の扇の要に当たり、標高は約170mである。

発掘調査は道路建設関連で、調査区は東西方向に等高線に沿う形で長さ320mに亘るが、巾は4.6mと狭くトレンチ調査のようである。検出された遺構は、石器集中4箇所と礫群2基である。

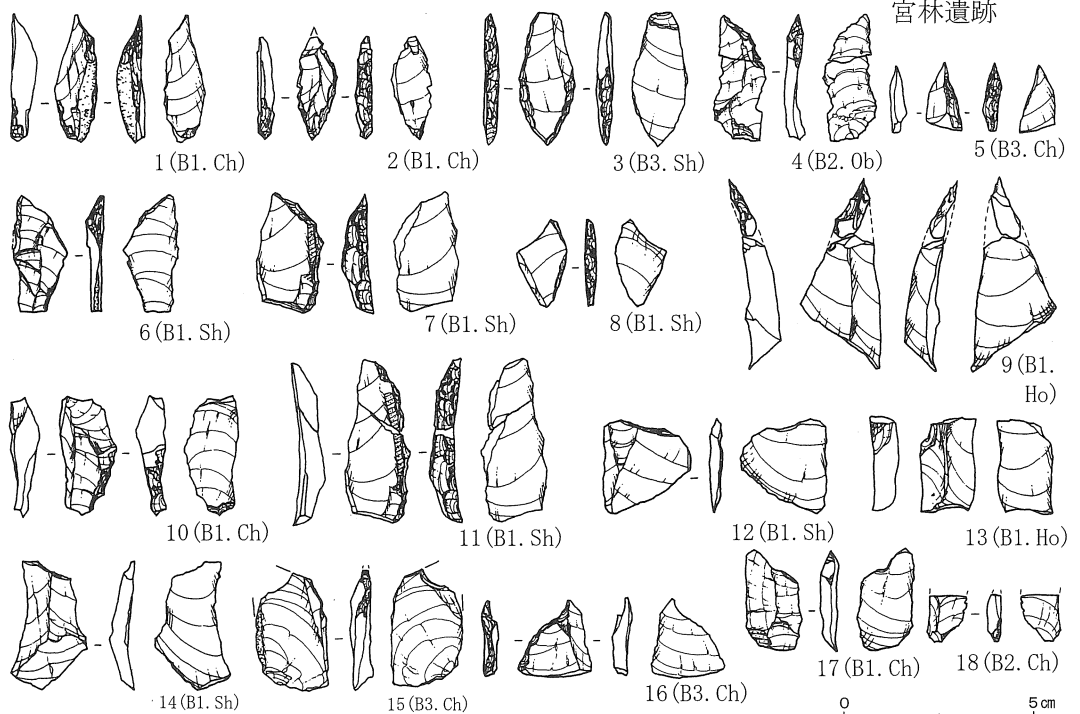
石器集中の概要

1号ブロック：石器点数は61点、分布は径約2mの範囲に比較的まとまっている。南半分が調査区外となるため、全体の把握はできない。礫群と平面的に重複している。石器石材はチャート26点、黒耀石35点と黒耀石のほうがやや優勢である。Toolはチャートのナイフ形石器先端部破片1点のみである。

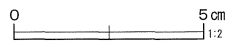
2号ブロック：石器点数は15点と少なく、遺物の分布が散漫で石器集中として捉えられるか疑問である。石器の分布範囲内から礫群が検出されている。石器石材はチャート7点、



城の腰遺跡



宮林遺跡



第5図 城の腰・宮林遺跡

黒耀石6点、凝灰岩2点とチャートと黒耀石が拮抗している。Toolは凝灰岩製のナイフ形石器1点のみである。

3号ブロック：石器点数は127点と本遺跡で最もまとまった資料である。遺物分布は密集しており、集中部のほとんどが調査されたと思われる。石器石材はチャートが98点で全体の77%を占め、黒耀石は28点、凝灰岩1点である。Toolはナイフ形石器11点を主に、搔・削器、彫器、ドリルと多様な石器が出土した。ナイフ形石器はチャート7点、黒耀石3点、凝灰岩1点である。

4号ブロック：石器点数は18点と少なく、遺物の分布は散漫である。石器石材はチャート1点、黒耀石16点、ホルンフェルス1点である。Toolはなくチャートとホルンフェルスが剥片で黒耀石はすべて碎片である。

石器石材の呼称は、報告書の巻頭写真から本地域の他の報告書と合わせて一部変更した。また、酸性凝灰岩は写真をみる限り頁岩と分類されている石に近いと思われる。

出土した石器は総数221点で、Toolが全体の中で占める割合は7%である。また、Toolの中でナイフ形石器が80%を占めている。その他は搔・削器、彫器、ドリルである。接合資料が比較的多い割りに石核が1点と少ない。

器種組成

ナイフ形石器	尖頭器	搔・削器	彫器	その他	剥片	碎片	石核	合計
12	0	1	1	1	103	102	1	221
5%	0%	0%	0%	0%	47%	46%	0%	100%

石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	頁岩系	砂岩	ホルンフェルス	安山岩	その他	合計
3	0	132	85	0	0	0	1	0	221
1%	0%	60%	38%	0%	0%	0%	0%	0%	100%

ナイフ形石器の石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	頁岩系	安山岩	合計
2	0	7	3	0	0	12
17%	0%	58%	25%	0%	0%	100%

ナイフ形石器

3号ブロックを主に12点のナイフ形石器が出土した。石材はチャートが7点、黒耀石3点、凝灰岩2点である。形態と石材の関係は、黒耀石と凝灰岩は第1形態に限られ、第2形態は全てチャート製で、大きさは凝灰岩が大形、チャートが中形、黒耀石が小形の傾向がみられる。第1形態8点(1~8)、第2形態2点(10・11)である。第1形態のナイフ形石器を観察すると、素材剥片は上位3点、下位5点で刃部は右刃3点、左刃4点と何れも偏在はみられない。長さは3~7cmの範囲で3cm前後、4cm大、7cm大の3つのグループを形成するが、幅は差がなく直線的に分布している。次に調整加工をみると、背縁加工は1~3・6・7がa)、4がb)、8がe)、5がf)と多様である。側刃縁の加工は1・2・4~6がi)、3・7?がiii)、8がiv)で基部の形状は2・4・8が1)、1・3・5・7が2)、6が3)で基部裏面の調整加工は2・5でみ

られる。裏面加工のナイフ形石器が一定量含まれている。3は砂川遺跡A地点の5、坂東山遺跡の4と大きさの違いはあるが近似している。8は基部を裏面加工のみで構成するもので、砂川遺跡F地点の2と共通すると思われるが、上半部を欠くため全体の把握は難しい。

当該地域では黒耀石の使用率が低いが、城の腰遺跡ではチャート／凝灰岩と共に一定の割合を占めており、3者の大きさの違いは他地域の石器群を考えるのに参考になる。

f) 宮林遺跡 (5図)

宮林遺跡は狭山丘陵の北側裾に位置し、標高は約120mである。遺跡は中氷川神社の西側で、南北に古い埋没谷と思われる湿地帯が入っており、台地の幅は約120mと狭くなっている。

発掘調査は道路の拡幅に伴うもので、幅は約5mで南北に長い調査区である。石器集中は5箇所検出されており、そのうち1号ブロックと2号ブロックがほぼ調査されている。

石器集中の概要

- 1号ブロック：石器点数は229点で全体の51%を占める。遺物分布は南北約2m、東西約3mの楕円形で密集度は高い。石器石材はチャートが94点、頁岩110点と拮抗しているが頁岩の方が僅かに多い。Toolはナイフ形石器15点と搔・削器が出土しており、石核を中心に剥片類の接合が比較的多くみられる。
- 2号ブロック：石器点数は140点で全体の31%を占め、1号ブロックに続いて主体的石器集中である。遺物分布は径1～1.5mの円形で、調査区内で完結している。石器石材はチャート125点、頁岩2点と圧倒的にチャートが主体を占める。他の石器集中ではこれほどの差がみられるものはない。Toolはナイフ形石器6点と彫器が出土している。接合資料は1号ブロックと比べ明らかに少ない。
- 3号ブロック：石器点数は28点と少ない。遺物の分布は調査区の制約があるが散漫である。石器石材はチャート14点、頁岩11点と拮抗するが僅かにチャートが多い。Toolはナイフ形石器1点のみである。
- 4号ブロック：石器点数は19点と少なく遺物分布は散漫で、礫を伴っている。石器石材はチャート13点、頁岩2点とチャートの占める割合が高い。Toolは彫器と敲石が出土している。
- 5号ブロック：石器点数は31点である。遺物分布は径約2mの円形に比較的まとまっている、石器石材はチャート3点、頁岩9点で頁岩の方が優勢であるが、本石器集中は流紋岩が19点出土している。Toolは彫器のみである。接合資料はチャートと流紋岩ともに石核に剥片が接合する良好な資料である。

以上、各石器集中を個別にみたが、次に全体と石器集中の関係をみる。遺物分布が密集型 (B1・2・5) と散漫型 (B3・4) がみられる。この違いは石器点数にあらわれ、接合資料等の偏りがみられる。石器石材はチャートが主体を占める石器集中と頁岩が主体を占める石器集中に分かれるが、極端に偏るのは2号ブロックのみである。また、5号ブロックにおいては流紋岩が主体を占め、良好な接合資料がみられる。Toolは、ナイフ形石器が複数出土しているのは1・2号ブロックで他は単独か出土していない。

石器総数は447点でToolの占める割合は6%である。Toolはナイフ形石器22点と搔・削器、彫器である。剥片類及び石核が多く、良好な接合資料がみられる一方、ナイフ形石器のほとんどが破損品である。当該地域の他遺跡と比べ場の機能の違いによるものかもしれない。

器種組成

ナイフ形石器	尖頭器	搔・削器	彫器	その他	剥片	碎片	石核	合計
22	0	1	4	2	294	112	12	447
5%	0%	0%	1%	0%	66%	25%	3%	100%

石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	頁岩系	砂岩	ホルンフェルス	安山岩	流紋岩	合計
0	0	249	3	134	2	38	0	20	446
0%	0%	56%	1%	30%	0%	9%	0%	4%	100%

ナイフ形石器の石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	頁岩系	安山岩	ホルンフェルス	合計
0	0	9	1	8	0	3	21
0%	0%	43%	5%	38%	0%	14%	100%

ナイフ形石器

石器集中3箇所からナイフ形石器22点出土した。石材はチャート9点、頁岩8点、黒耀石1点である。チャートと頁岩によって構成されるのは当該地域の他の遺跡と共通する。第1形態が4点と少なく、第2形態が12点で1対3の割合である。当該地域では第1形態が目につく遺跡が多く、その意味では異質である。第1形態のナイフ形石器は、素材剥片を上位に用いたのが3点で下位は1点である。刃部は右刃2点、左刃2点と同数である。背縁加工は2・3がa)、1・4がb)、側刃縁は2・3がi)、1がii)、4がiv)、基部の形状は2・3が1)、1・4が3)である。4は黒耀石製で打面を残置している。

g) 中砂遺跡 (6図)

中砂遺跡は狭山丘陵から延びる所沢台上に位置し、標高は約91mである。遺跡は緩やかな北斜面で低い部分は砂川掘との標高差はほとんどみられない。層位は南から北に向かって下層から省略されて行き、最後は礫層の直上にソフトロームが乗る状態である。遺物の分布は調査区全域に及んでいるが、特に蜜に分布していたのは、北側であったため、石器群の層位による分離は不可能で、石器集中の重複によって岩宿II期/砂川期/細石器石器群が混在しているのが現状である。ここでは、石器の特徴から砂川期の特に第1形態のナイフ形石器を取り上げる。

ナイフ形石器

第1形態の3点を抜き出した。石材は粘板岩製で大きさは4cm大と約6cmで比較的大形である。背縁加工は3がa)、2がb)、1がc)、側刃縁は1がi)、2・3がii)である。基部の形状は1・3が1)、2が2)となる。

h) 鶴ヶ丘遺跡C区 (6図)

鶴ヶ丘遺跡は人間台地に位置し、標高は約33m前後である。遺跡は小畔川流域の左岸で、上流に屋淵遺跡がある。石器集中は1箇所検出さして入るが、詳細は不明である。Toolの多くはグリッド出土のようで、集中部からはチャートの剥片と石核が主に出土し接合関係がみられる。

ナイフ形石器

石器集中1箇所およびグリッドを合わせて、ナイフ形石器が14点出土している。石材はチャートが殆どで、頁岩が若干含まれる。1は頁岩製で先端を欠損しているため、計測不可能であるが最も大形になる。チャートと頁岩の組み合わせで、頁岩で大形のナイフ形石器をつくる傾向は、当該地域の他遺跡と共通する。第1形態は4点(1~4)、第2形態は10点(5~14)で第2形態が倍近く出土している。第1形態と第2形態の比は砂川遺跡A地点、坂東山遺跡、屋瀬遺跡、西久保遺跡、城の腰遺跡が第1形態が多く、砂川遺跡F地点、宮林遺跡では第2形態が優勢である。この違いは場の機能差に由来するものなのかも知れない。

第1形態のナイフ形石器を観察すると、素材剥片は上位が2点、下位2点、刃部は右刃2点、左刃2と同数である。背縁加工は1・2・4がa)、3がe)、側刃縁は1・4がii)、2がiii)、3がiv)、基部の形状は4が1)、2・3が2)、1が3)である。点数が少ないが側刃縁の加工は多様である。

i) 打越遺跡第2地点(6図)

打越遺跡は大井台に位置し、標高は約21mである。綾瀬川北側の遺跡分布は、狭山丘陵周辺と荒川崖線に沿う台地先端部に集中する傾向がみられ、主体となる遺跡の時期がこの2地域で異なっている。砂川期の遺跡は狭山丘陵からその北側に分布するのに対し、いわゆるナイフ形石器終末期と呼ばれる遺跡が台地縁辺部にまとまっている。石器集中は1箇所で礫群と分布が重複している。黒耀石の槌状剥離を有する尖頭器が集中部近くの土壌底部壁中から出土している。この事例を尖頭器との共伴とするかは、見解が分かれている。

器種組成

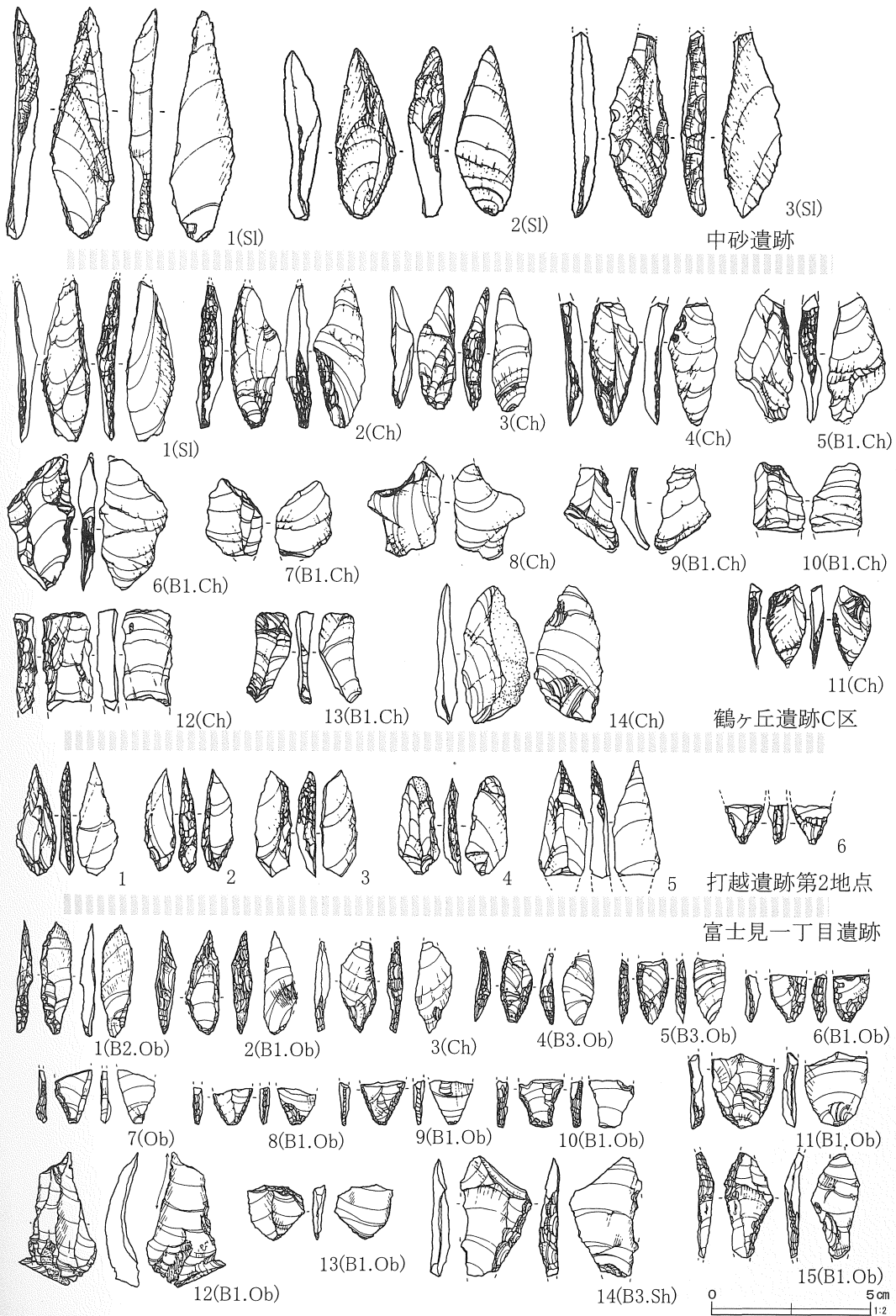
ナイフ形石器	尖頭器	搔・削器	彫器	その他	剥片	碎片	石核	合計
6	1	1	0	0	46	30	0	84
7%	1%	1%	0%	0%	55%	36%	0%	100%

ナイフ形石器

ナイフ形石器は6点出土している。いずれも3cm大の小形の一群である。石材は個別に明記されていないが珪岩(チャート)が主体を占めている。第1形態は4点(1・2・5・6)、第2形態は2点(3・4)と欠損品を加えると第1形態の方が多くなる。第1形態の素材剥片は上位2点、下位2点と同数で、刃部は右刃が無く、左刃が3点である。背縁加工は1・2がa)、5?がc)、側刃縁は1がi)、2がiii)である。基部の形状は2・6が1)、1が2)となる。6は基部破片のため詳細は分からないが、基部裏面に調整加工がみられる。ナイフ形石器の大きさ及び形状は、今回対象としている他遺跡のものとはやや異なり、次項の富士見一丁目遺跡に近い感じを受ける。時期的な問題も含めて検討する必要がある。

j) 富士見一丁目遺跡(6図)

富士見一丁目遺跡は、入間台地の中央部に位置し、標高は約31mである。入間台地は扇状地形が良く残っており、幾筋の小河川が越辺川に向かって北東方向に流れている。遺跡の現況は、駅前宅地造成等によって平坦となっているが、調査区内から埋没谷が検出され、旧石器時代は大谷川に注ぐ湧水地点であったと思われる。石器集中は埋没谷の北側に沿って3箇所検出された。



第6図 中砂・鶴ヶ丘・打越・富士見一丁目遺跡

石器集中の概要

石器集中1：石器の点数は93点で、遺物の分布は密集している。南側を古代の住居跡によって一部壊されており、住居跡覆土中から石器が出土している。Toolはナイフ形石器と彫器、搔・削器が出土している。彫器は4点すべてが本石器集中から出土である。また、やや離れた地点から切出形石器、住居跡覆土中から細石核が出土しているが、当該期の石器群ではないと考えられる。

石器集中2：石器の点数は42点で、遺物の分布はやや散漫である。Toolはナイフ形石器1点のみである。

石器集中3：石器の点数は41点で、遺物の分布は散漫である。Toolはナイフ形石器5点と搔・削器等が出土しており、全体に占める割合が高い。石器集中1と同じく集中部からやや離れて細石刃がみつまっているが、共伴しないと思われる。

石器総数は193点で、石器石材は黒耀石が89%を占めている。砂川期以外の石器群も若干混じっているが、何れも黒耀石が用いられているため、分離は難しい。明らかに別時期のものを除外してカウントしたが、完全な分離はできていないが、器種・石材組成の体勢に問題がないと思われる。本遺跡は、入間川流域【砂川期：砂川型】とした遺跡群と、黒耀石の用い方等に違いがあるため、時期的に新しくなる可能性も考え区分している。また、上ヶ屋型彫器が4点まとまっており、武蔵野台地／相模野台地において上ヶ屋型彫器を複数有する遺跡が点在しており、それらとの検討も必要である。

器種組成

ナイフ形石器	尖頭器	搔・削器	彫器	その他	剥片	碎片	石核	合計
19	0	3	5	0	120	45	1	193
10%	0%	2%	3%	0%	62%	23%	1%	100%

石材組成

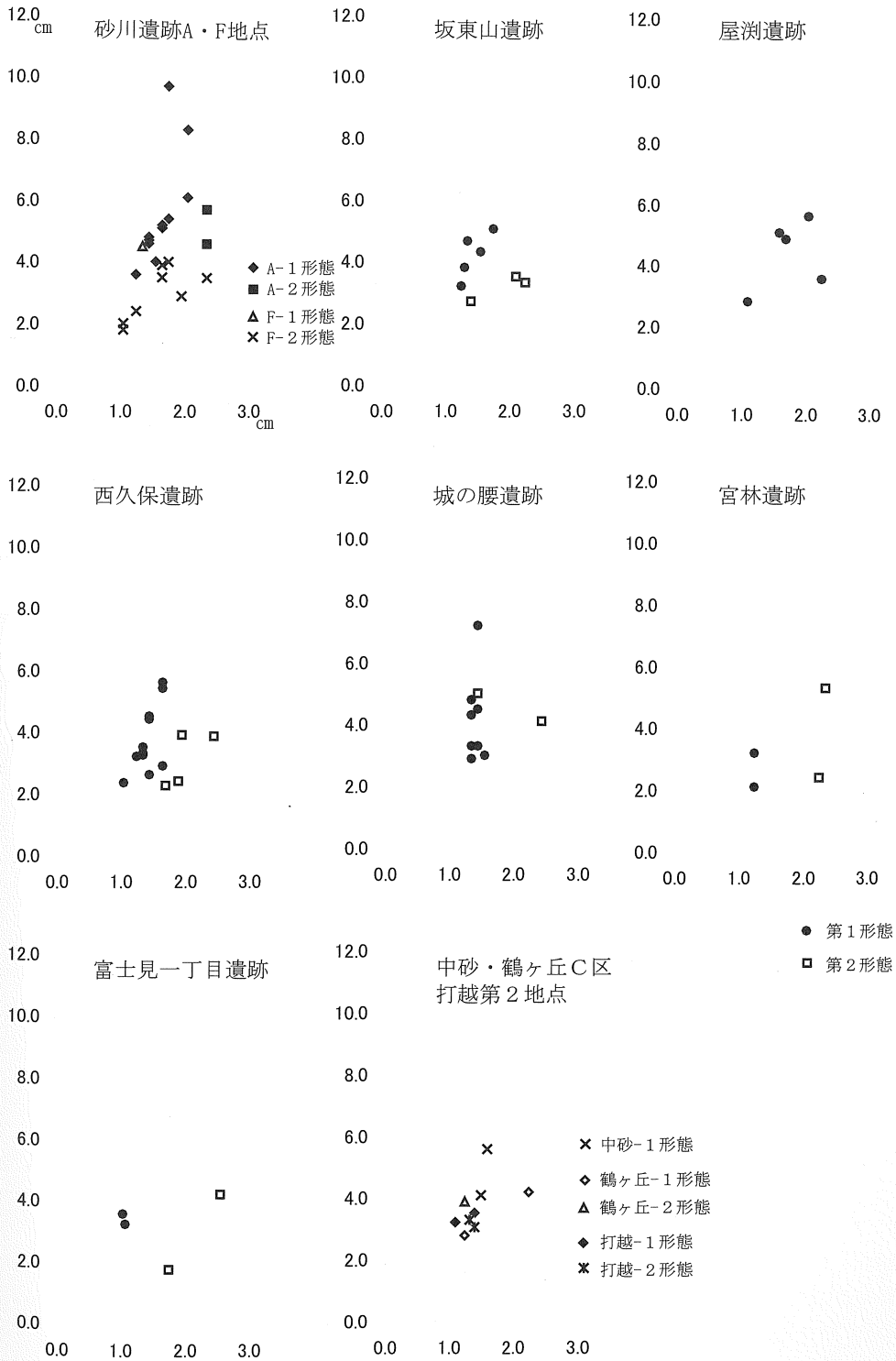
凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	ホルンフェルス	頁岩	珪質頁岩	安山岩	その他	合計
0	0	1	189	0	2	0	1	0	193
0%	0%	1%	98%	0%	1%	0%	1%	0%	100%

ナイフ形石器の石材組成

凝灰岩	粘板岩	チャート	黒耀石	ホルンフェルス	頁岩	珪質頁岩	安山岩	その他	合計
0	0	1	17	0	1	0	0	0	19
0%	0%	5%	89%	0%	5%	0%	0%	0%	100%

ナイフ形石器

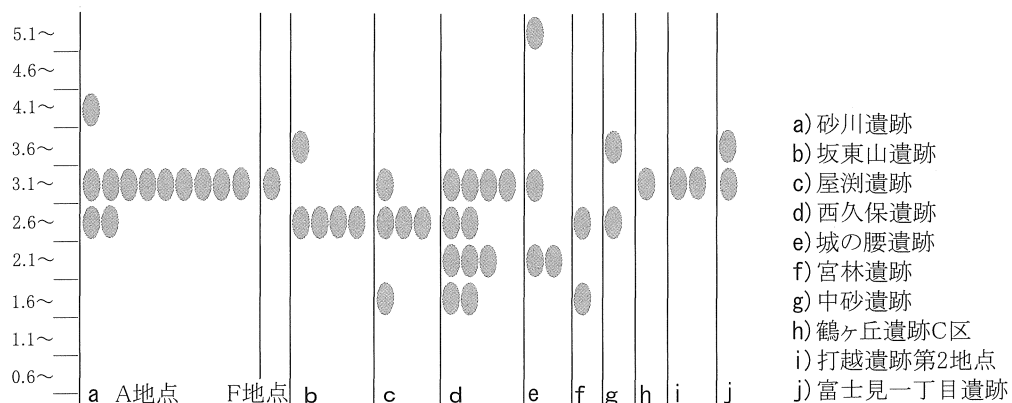
石器集中3箇所からナイフ形石器19点が出土した。他の遺跡と異なり黒耀石が主体を占め、チャートと頁岩が各1点である。基部の破損品が多いが、第1形態が12点（1～11・15）、第2形態が3（12～14）で第1形態が圧倒的に多い。第1形態の剥片素材は上位が5点、下位が7点で有意な差はみられず、刃部は右刃が3点、左刃が2点とほぼ同じである。背縁加工は1～5 a)、15がc)、側刃縁は2～5 ?・15は i)、1は iv) で、基部の形状は1・3・5が1)、2・4 ?が2) である。8は破片であるが基部裏面に調整加工がみられる。



第7図 ナイフ形石器長幅グラフ

小結

以上、入間川流域【砂川期：砂川型】及びその周辺の11遺跡（12地点）を対象に、ナイフ形石器の検討を行った。当該地域は、砂川遺跡を含む最も砂川の石器群がまとまる地域である。一般に砂川石器群としてイメージされるのは、砂川遺跡出土のナイフ形石器に相模野台地の良好な資料で肉付けされた石器群である。近年本地域で砂川期の良好な遺跡が調査・報告されることによって、改めて贅肉を落とした砂川石器群を目にすることが出来るようになった。本稿では、それら石器群を統一した視点で観察することが目的である。



第8図 ナイフ形石器長幅比

本地域で用いられている石器石材は、チャートを主体に頁岩が一定量含まれている。また、黒耀石の利用は少なく、限られた遺跡でのみみることが出来る。ナイフ形石器に用いられた石材は、全体の石材組成を反映するものが多いが、坂東山遺跡のガラス質黒色安山岩、西久保遺跡の赤玉石のように、その遺跡で少量の石材がナイフ形石器の素材となっている場合もある。

砂川遺跡のナイフ形石器は大・中・小形の違が指摘されている。また、砂川期全般においてもナイフ形石器の大・中・小形の問題は、石材と関連して検討されている。当該地域でナイフ形石器に用いられた石材はチャート／頁岩・凝灰岩／黒耀石の順である。この3石材が一定量用いられているのは、城の腰遺跡のみであるが、そこでの大きさの変異は凝灰岩が大形、チャートが中形、黒耀石が小形の傾向がみられる。次に、頁岩・凝灰岩／チャートの組み合わせは砂川遺跡A地点、屋淵遺跡、鶴ヶ丘遺跡でみられ、頁岩・凝灰岩で大形、チャートで中形のナイフ形石器が作られている。しかし、遺跡単位での相対的な違いにしか過ぎない可能性も高く、頁岩は何cm、チャートは何cmといった普遍的傾向して把握できるかは疑問もある。しかし、頁岩／凝灰岩／チャート等のいわゆる在地石材以外の、希少石材に関しては徹底した利用と小形であってもToolを作ろうとする意図が感じられる。

次に、ナイフ形石器の形態であるが、当該地域は砂川遺跡を代表に非常に近似した石器群である。しかし、細部では裏面加工を一つ取り上げても砂川遺跡A・F地点、坂東山遺跡、城の腰遺跡、鶴ヶ丘遺跡で卓越するが、屋淵遺跡、西久保遺跡には含まれないなど遺跡ごとに個性がみられる。細部での違いと、当該地域の共通性の検討は他地域との比較が必要になる。地域性、個別遺跡をより鮮明に語るため武蔵野台地、相模野台地の遺跡を今後みてゆくことにする。

以下次号に続く、参考文献等は最後に掲載する。

研究紀要 第19号

2004

平成16年7月26日 印刷

平成16年7月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 大里郡大里町船木台4-4-1

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社